

# 内視鏡が大腸の中に入るのが見えました

今 月号で「原子力文化」は創刊六〇〇号だそうですね。おめでとうございます。

僕の連載も八二回になります。これもまたおおきに。連載はじめたのは、二〇一三年一月号からでしたな。東日本大震災が二〇一一年三月でしたから、まだ震災の影響が色濃ゆう残ってたころですわ。

そんなとき「連載お願いします」といわれて、普通どうします? 下手したら、世間から袋叩きに遭うかもしれません。

正直なところ、僕、原子力業界の人間やないし、断ろうかと思っちゃったんですけど、それまで、この月刊誌の対談にでたり講演もあちこちで引き受けてましたから、義理もあつたし、

「事故のおかげで、出てくれる人が少なくなりました」なんて、言われたりしたら、よおし、「義を見てせざるは勇無きなり」と思いこの連載を始めたんです。

幸い、周りから文句言われることもなく、八二回もつづいて、おまけに創刊六〇〇号にもお付き合いできるなんて……。

改めてじっくり読んでみると、僕の好評連載(笑い)のほかにも、ドイツに住んでらっしゃる川口マーンさんやら、中東の専門家の保坂修司さんやら、国際派の人が連載つづけてらっしゃるし、毎月のインタビューも硬軟あつて面白い。ページは少

ないけど、「原子力文化」は中身の濃い月刊誌です。読む価値が十分あると思いますよ。

部数がなかなか伸びないと言ってるけど、怠慢でっせ。それは、努力がたりませんな。今、どんな雑誌でも減ってるようすな。まず見てもらう機会増やさなあかん。

あつ! それから、僕も相変わらず講演やっておりますんで、読者の方、この連載面白いと思つたら、是非、呼んでください。お問い合わせは編集部まで。これ本当です。あはははは。

**下町スコープという訓練用内視鏡をテレビで紹介したことがありました**

さて、連載中に、大阪で生まれた「ものづくり医療コンソーシアム」も、六周年になります。

この財団法人は「豊かな療養生活と夢に満ちた先進医療にもつくり技術を活かす 身近な『不便』に匠の技で革命を!」ということをテーマに掲げて、医療現場の環境を、大学と中小企業が協力して、改善を目指そうというグループです。

以前、「下町スコープ」という訓練用内視鏡を、テレビで紹介したことがあります。

日本の内視鏡は優秀やけど、高くてなかなか学生の練習には



●(株)アオキ取締役会長  
**青木 豊彦** (あおき・とよひこ)

1945年大阪府生まれ。1997年(株)アオキは航空機メーカーのボーイング社の認定工場に。また東大阪の技術力を生かし、人工衛星「まいど1号」を開発、2009年に打ち上げ成功。その後無人垂直飛行機「AKITU」も開発に成功した。2014年4月、国立和歌山大学客員教授に就任。2016年には大阪市立大学学長特別顧問に就任。現在は(一財)ものづくり医療コンソーシアムの理事としても活躍中。



使えなかった。いくら機器がすぐれていても、それに伴う医療関係者の技量がなければ宝の持ち腐れになります。

相談を受けて、松電舎という大阪の企業と医療コンソーシアムが共同開発しました。

松電舎さんの努力で、値段は従来の内視鏡の10分の1になりました。もっと下がる余地もあります。

松電舎さんは、工業用マイクロスコップや顕微鏡なんかの専門メーカーです。技術はすごいもんでっせ。それを少し視点を変えるだけで、医療分野で訓練用の内視鏡という需要を開発できたんですよ。

日本の中小企業は、それぞれ専門性が高く、技術も持っているんですが、視野がせまい。それぞれの専門分野以外が、よく見えてないです。もったいない。

医療コンソーシアムは、医療現場のニーズと中小企業の技術力の橋渡しをすることを考えて発足したんです。

それがうまくいったのが、下町スコップです。

一月二十六日には「ものづくり医療コンソーシアム」の六周年記念をやります。

新製品の発表もやるつもりです。楽しみにしてください。

### エックス線検査で大腸にポリープがあるようだということ

「僕も内視鏡のお世話になりました。エックス線検査で、大腸にポリープあるようだということ、内視鏡検査をしたんです。ベッドに寝転んでると、映像で、内視鏡がどんどん自分の大腸



の中に入るのが見えました。まるでトンネルをくぐっているようで、面白いというか、けったいというか、なんとも不思議な感覚でした」と東京のおっちゃん。

君も、もはや前期高齢者やし、いろんなこと起きるわねえ。

まあ、東京のおっちゃんばかりでなく、日本人の食生活の変化で、胃や大腸のがんやポリープは増加してるそうです。注意せんとね。

「青木さんも、東京来ると、揚げものや卵ばかり食べて、野菜あまり食べませんねえ。人のことは言えないのやないですか?」

「シツ、何を言ってるんだい。君は。家族に誤解されるじゃないか。こんなところでしゃべることじゃないだろ!」

「あせると、なぜか標準語になりますなあ」(笑い)